

色の話になると、「まかして」と身を乗り出すが、これが意外と知らないことが多い、というよりもほとんど知らない。知っていることは、絵の具屋に行けば100とか150とかいう数字の色の数が並んでいる。オレは洋画というジャンル、西洋から日本に入ってきた油絵や水彩画をやっている。日本で古くからあった日本画にはまた違った絵の具が並んでいるが、日本画のことも疎い。色鉛筆には500色のものがあるとか、これは美術品だねえ。

“赤色”の横に“青色”を置けばきれいだとか汚いだとか、“青色”と“黄色”をまぜれば“緑色”になるとか。“白色”にも“黒色”にも“青色”にも“黄色”にもそれぞれ何種類もの違う色があり、絵の具屋に行けば、100とか150とかいう数字の色数が並んでいる。とまあこういう話ならばこれぐらいのことは、これぐらいの言葉は出てくる。

松田壽男著<古代の朱>人間が長い石器時代の次に、銅や錫や亜鉛を発見し、それらを合金させて青銅を作りだす。その前に、場所によっては別の金属を知っていたのではなかろうか。砂金と朱砂はその候補としてまったくふさわしい。何より金色と赤色は原始人の目を射る。だから産地では金や朱の使用がずいぶん古くから起こっているに違いない。今日から考えるとウソのように、あちらこちらに露頭があった。山奥の露頭部が流水のため削られ、それらが川に運びおろされ、川床の水速がゆるむ部分に堆積する。こうして川床に集まり積もった黄金や朱砂が、我々の先祖の目をひかなかつたはずはないであろう。

朱砂は辰砂(しんしゃ)とか丹沙(たんしゃ)と書かれる。日本では古来「丹」にと呼ばれた。それは水銀と硫黄の化合物  $HgS$  であって実に美しい赤色をかもしだす。パーミリオンである。純粋な赤色、アカ色の総称である。中国の甲骨文字で朱は牛に横棒が一本加わっている。牛を胴切りにするとき吹き出す血の色をアカで示している。先祖の古代人はすでに縄文時代から土器や土偶に朱をぬった。古墳の時代になっても、その石室や石棺に朱を塗ったり、つめものに使っている。九州に多い彩色古墳でも、その石壁の模様用いた。あの眩しいような赤色は、朱砂を粉末にして塗り付けたものだ。

今の奈良県宇陀郡菟田野(うたの)に大和水銀鉱山(1970年閉山)があった。隣接する丹生谷には水銀含有の母岩が露頭しているところがある。おそらくそのような母岩が真っ赤に野を染めて露頭していたので、これを血原と呼んでいたであろう。私は古代の朱砂産地を探して各地を歩き回った。日本全国にこのような場所がいくつもあった。赤い岩やら砂やらで彩られた原野なんて想像するだけでも美しくもおどろおどろしくも。

先生、水彩画家と一緒に水銀坑道にもぐる経験談：両壁は紅一色、天井もまた紅一色、足を載せている岩盤も紅一色。カンテラの火は真っ赤なトンネルをどこまでも照らしていった。牛肉の切り身さながらの、まだらな紅の縞模様もある。白い母岩にひとすじの美しい紅を刷いた坑道も見られた。朱砂と呼ばれる水銀の硫化物は、文字の上からはパーミリオンを思わせる。しかし実際は決してトキ色ではない。むしろ紅色であり、それもこの世のものとは思われない赤である。しかしよく見ると、その中にもいろいろな赤がある。絵の具箱をひっくり返しても、赤系統のものを全部並べ立てても、とうていこれには及ぶまい。絵の具では比較にならないような深い潤いに輝いているのだ。

先生が水銀坑道をもぐった話、これはうらやましい、オレも覗いてみたい、カンテラ下げて梯子を下ってみたい。天然露頭の赤の世界を歩いてみたい。陽の光の下での露頭もいいが、薄暗い曇り空の一瞬、チラリ光が射せば、赤が輝きだし、まわりの黒や白とあいまって、素晴らしい光景だろうと想像できる。

先生、赤の話になると頭の中が赤く回転するようだが、どんな赤色かな、「素晴らしい赤 赤の中の赤」と言われて、オレも興奮する。「どんな赤色なのかな 山地によって 石によって 違う赤かな」

元来のパーミリオンは今はない、重金属を使った絵の具が規制され、今のパーミリオンは、元来のものに比べ、似つかない色だそう。油絵の具の赤色には基本的には10色ぐらいあるかな、オレが持っているのは赤色は5本だ。Cadmium-RedのLightとDeep Naphthol-Red QuinacridoneのMagentaとCrimsonだ。

一向宗、一向一揆、踊念仏、聞いたことがある、教科書で習ったことがある、その程度の知識、その程度の興味しかなかった。インド中国からやってきた仏教は、失礼な言い方ですが、ガラパゴス形式ではあるまいが、日本独自の解釈、進化が続々と出てきた。「踊念仏」これには驚き、笑い、できたらしたい、素晴らしい、と思った。

一向宗：Wikipediaによると、一向と一遍は鎌倉時代同時期の浄土宗の僧侶だった。一向が創めた、「一向宗」一遍が創めた、「時衆」ともに遊行や踊念仏を行儀とする念仏勧進聖で、二つは混同されるようになった。のちには江戸幕府により親鸞の浄土真宗が一向宗と呼ばれるようになった。その後幾多の宗派の、俗にいうごたごたの末現存に至っているが、そのごたごたは、今は興味がないので、読む気も、聞く気もない。一向とは、「ひたすら」「一筋」の意。

一向一揆：戦国時代に浄土真宗本願寺教団によって組織された、僧侶、武士、農民、商工業者などで形成された宗教的自治、一揆のことである。蓮如が唱える、「安心は阿弥陀如来の本願にすがり 一心に 極楽往生を信ずること」この行儀に従う信仰組織が形成された。

一遍：鎌倉時代「時衆」の開祖。各地で修業、行脚の後、「踊念仏」を始めた。一向は時衆を率いて遊行を続け、下人、非人を含む民衆を踊念仏で極楽浄土へ導いた。観念的な仏教的、思惟、教義より、ひたすら、「南無阿弥陀仏」の六文字の念仏を唱える実践に価値を置いた。

一遍の念仏踊りは、見世物興行に近い。人の集まるところに一段高いステージを設け、20人から40人、半分は尼僧を含む男女が歌い踊り、やがて観客を巻き込んで法悦にいたる趣向だった。その過激な狂乱状態は保守的な人たちから反発を受けた。「法悦状態で服を脱ぎ罵詈雑言を叫ぶ踊念仏の見苦しさ」野守鏡より。一遍は当時の僧侶の中で比叡山に登っていないひとりだった、故に官僧ではなく、ひとりの聖だったという。

栗田勇著<一遍>保元の乱・平治の乱と長く続いた源平の争いがようやく終わり、源氏、北条に主権が移り、北条と後鳥羽院が対立して承久の乱がおこる。一息つく間もなく蒙古襲来の不安。国際的に元が政権を握るにつれ、隣の中国では南宋が滅び、続々と亡命する知識人や僧がやってくる。このような歴史的断層を世の人は法の末世と実感せざるを得なかった。1000年ごろには正法・像法の世は終わり末法の世に入ったと言われていたが、それから100年、いよいよ仏の救いからはほど遠い、闇の世に沈む思いをいっそう深くしていた。

1175年、そんな中で、凡夫庶民も救われねばならないと求め続けた法然が、念仏に最後の希望を見出した。

1274年、一遍が熊野で悟りを開いた。鎌倉時代から室町時代にかけて、もっとも流行して、一世を風靡したのが一遍上人が開いた、踊念仏、時衆（後に時宗じしゅう）の人々であった。その猖獗（好ましくないものがはびこる）をきわめた流行は、国宝「一遍聖絵」にいくつか描かれている。京都に入ったときの大盛会のさまは、まるで神楽か歌舞伎の舞台のように檣を組んで、数千人が鉦を叩き、速いテンポで念仏、和讃を唱え乱舞する。まるで今日の踊る宗教とかロックか ディスコのように、時には風俗となって、上は貴族から下は非人にいたるまで、ほとんど大流行となるのである。

「念仏まふしさふらへども、踊躍歓喜（ゆうやく）の心おろそかにさふらふことも、またいそぎ浄土へまひりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにて、さふらうやらんと、まふしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。」<歎異抄>

ぎりぎりに追い詰められた境涯から、しかし物質的に逃れようもなく、一方では甚だしい禁欲と自制を強いられた、それらが精神的に爆発し、情念のオルジー（仏？過度な飲食）となる。この古代的情念の噴出を、仏教という形を借り解決したのが一遍上人である。

時宗の人々は正規な僧衣をつけなかった。野の馬のように跳ね飛び、裾を乱し、大声で和讃、念仏を合唱し、鉦を連打する。「不当を好む」この世俗的ルールを破ることによって、俗なる境涯から、汚辱と悲惨を裏返しに、聖別された瞬間、聖化される空間へと飛躍したのである。

◎「それでは 三峰山（みうね）にしましょうか」ということで御杖（みつえ）村役場に電話をかけた。「道路は 凍結していますか」「今日 ただいま 雨が降っています この雨が 明日は 凍結するでしょう」「あれれ」ずっと暖かい日が続いていたが、日本列島に寒波がやってきたようである。

◎まもなくオレの誕生日という今日、スタッドレスタイヤを履いた車で向かった。東吉野村あたりから道路に白いものが混じり始め、すれ違う車の中には、屋根に雪を乗せている奴が増え始めた。白い雲、薄暗い雲の合間に青い空も見える、「これぐらいで 天気 悪くならないで くれ」と案じつつ登山口のある青少年旅行村に向かった。

◎雪の林道を歩く。久しぶりの山だ、嬉しいねえ、気持ちちははずむねえ。初めての雪、先ほども氷の上ですってんころりん、林道も雪を上手く使って歩かないと滑る。車の轍のあと、光ったところは要注意である。

◎そばに足跡、手のひらサイズ、前に広がって、後にすぼまって、二本づつの爪痕、カモシカか、ゴジラか、妖怪か。

◎「さて登り口」というところに軽トラが4台、小屋から煙が、男女の談笑する声が、「なにか 軽作業のあと いっぱい飲んでいるの かな」と少し登り始めると、丸太材に杭、げんのうにつるはし、背負い子が置いてある。先ほどの人たちは、登山道を修繕してくれている人たちだ。ありがたい人たちだ、「一杯飲んで」なんて言ってゴメン。

◎谷筋を登っている、上空はゴーゴーと風の音がするがこのあたりはまだまだ穏やか。昨夜寝る時にも大阪でピューと風が吹いていた。天気は多少荒れ模様である。だいが登ってきた、北東の方角が開けている、曾爾（そに）高原の山々がポコポコ見える、緑に土、雪に畑、その向こうの街は津か、松坂か、四日市か。「この景色は すごい 日本も捨てたもんじゃない」と感激の声が飛んでくる。

◎乗越のピークにやってきた、三差路に標識がある。「山頂まで 2K 反対側は 高見山 白髭峠」と出ている。1000M ぐらいの山の上は、木々がたくさんある、ほとんどの木は葉を落とし枝が天を指している。今日の天気は樹氷が付きにくい天候のようで、ここらあたりの名物である樹氷はほとんど見られない。枝の上に白い雪、太陽も顔を出している。上の方でゴウゴウと風の音がするがここには吹いてこない、木々もまっすぐ立っている。

◎天気予報は、「曇り 強風 登山には適さない」と出ていたが青空と太陽も時には見える。空気が澄んでいるようで、まわりがよく見える。太古の時代、火山の爆烈口があったとか、そう聞くとそれらしき模様の山々が連なっている。

◎尾根道には雑木と言っては失礼だが雑木林。ぼちぼちブナが出てきた、親分というには少し細いが、若頭的な奴が元気に何本か立っている、シャラがある、みずならがある。

◎山頂を抜け、てっぺん付近にある、「八丁平」というところにやってきた、突然立木がなくなり、くさっぱらの台地、ここはいつ来てもいい、気持ちちはほっとする。とは言いながら、風の通り道なのか、「北風ぴーぷー吹いてくる」と洒落てもいられない寒さ、冷たい、手袋をとると、「いたい」今季初めての、「いたい」である。

◎身につけているネックウオーマー、これは暖かい、これひとつで上着一枚分のぬうちがある。初めて着けたが、まさかこんなにいいものだとは思わなかった。若い職人や、単者に乗っている奴らが着けているが、これはいい。

◎「ビューポイント」と張り紙がある。立木の隙間からポコリ高見山が見える。この山のことを称して、「日本のマッターホルン」の書いてある、まさかねえと思いつつも、「マ いいじゃないですか」前にも書いたがこの高見山は奈良と三重を結ぶ幹線道路のそばにある。今はトンネルで冬季でもスイスイ通れるが昔は、山すそをくねくね曲がってトラックやバスが難儀して通った道だそう。今でもこの季節には凍結するので、普通タイヤでは走れない。

◎今日は気温が低いようで、10センチ 20センチしか積もっていない雪だが、サラサラしている。天候にも恵まれた、膝も全く異変がない、体調もいい、疲れなど感じない、「山はいいねえ」この一言である。

◎少し下った避難小屋で、一時間遅れの昼飯。「寒い特は暖かいもの」ということでラーメンを持参した。水、コンロ、ボンベ、ガスを持ってきた。鍋に野菜を肉を卵を入れ、フーフーと言って食った。小屋とはいえ扉がない、じっとしているとじんじん冷えてくる、早々に引き上げ歩き出した。身体は歩きだすと自然と発熱して暖かい。

◎おお 滝が見え、林道が見え、下ってきた。手入れのいきとどいた杉の植林地帯。この滝の名は、「不動滝」幅広くどンドン水が流れ落ちている。小さい祠と赤い鳥居、滝を祀ったものか、水を祀ったものか、山を祀ったものか、里人の信仰心がしのばれる。

栗田勇著<良寛>この本を読み、いたく感じるものがあった。水上勉先生は、良寛が、あれだけの教養、あれだけの修行、曹洞宗の組織に身を置きながら、なぜにどこかの寺の住職に、なぜに傑僧にならなかったのか、なぜに働きもせず、なぜに作りもせず、飢饉の真っ最中の村々をまわって乞食したのか、「働かざる者 食うべからず」という調子で書いておられた。他の人たちも、良寛さんの伝記、詩歌、書に対して賛を惜しまないが、「なぜに 乞食に」という答えが出てこなかった。古代から近代まで、日本で、「放浪の」「漂泊の」という人たちはたくさんいたが、良寛さんが、放浪をしたかったのか、漂泊をしたかったのか、オレにもその理由が釈然としなかった。

相馬御風が紹介した良寛さん。天真爛漫で小児のように純真で、どこかとぼけていて懐かしい、そんな乞食坊主。良寛が40歳から58歳まで暮らした五合庵。先生がここを訪れると、今も水がしたたり落ちているらしい。

◎あしひきの 岩間をつたふ 苔水の かすかにわれは すみわたるかも

オレは、この歌を詠んで、滝谷出合いの避難小屋を思い出す。この小屋にはかつて3回お世話になった。五合庵は見たことが無いので、その広さもまわりの雰囲気もわからない。滝谷出合いの避難小屋のすぐ横にも、パイプを伝ってちょろちょろ水が出ていた。その水をペットボトルに入れ小屋の中で炊事に、酒の水割りに、お茶にといただいた。

◎冬ごもり 春さり来れば 飯乞ふと 草の庵を 立ち出でて 里にい行けば たまぼこの(道の意?) 道の巷に 子供らが 今を春べと 手まりつく ひふみよいなむ 汝がつけば 吾はうたひ あがつけば なは歌い つきて歌ひて 霞立つ 長き春日を 暮らしつるかも

◎君看双眼色 <君みよや双眼の色>この眼の色を見てくれ

不語似無憂<語らざれば憂い無きに似たり>語らないからと言って心に愁いが無いわけではない

さてここからが、面白い話ながら、何度読んでも難解、ちんぷんかんぷん、「正法眼蔵」が出てくる。道元の記した正法眼蔵を、500年以上経って、良寛読んだ。自身の生涯を決するように感動して読んだ、という。

◎先生：良寛が円通寺で道元に深く打ち込んだことは、良寛の真の自己探求を目覚めさせ、遠く俗界を捨てることを意味すると同時に、伝統的な僧職を捨てることを意味していた。<略>円通寺を出て、各地をめぐり行脚しながら、ひたすら参じ去り、参じ来たり、そして道元へと帰っていく七八年が流れた。良寛には、正法眼蔵の理解と実践に、生涯のバックボーンがあったと思う。時代的条件、儒学の素養や老荘への好み、寒山詩への傾倒、詩や歌や書への本能的な自己表現の嗜虐などが道元の思想の肉体化を特徴づけている。

◎先生：良寛は、「正法眼蔵」のどこに惹かれたのか。読んだものならだれもが知っているが、どこから読んでも、美しい詩句で、心を打たぬところはない。不思議に玲瓏たる球のような言語世界にとりこまれる。良寛は、詩としてこれを読んだ、体験した。道元は今までの經典の教えではなく、釈迦から尊者、達磨を経て一対一で受け継がれた体験的心理だと深く信じていた。きわめて、ビジュアルというか、幻視的体験がある。例えば、「古鏡」「空華」などそれまでの解釈を批判してイメージとして受け止めている。絶対的心理が露呈しているのをうたいあげている。「やまこれ山」という時、突然、宇宙のただなかにそびえる山が見えてくるから不思議である。この光景をひとたび見てしまったものに、いったいなにが語れよう。何をしても、何を見てもそれを突き抜けた世界が開けてくるはずである。道元はこの体験を大衆に伝えようと決意に満ちて帰国した。実際は布教を始めてみると政治的状況が組みせず、都を追われ、越前までおちのび、白山天台の法脈を頼りにせざるを得ないほどで、道元はひたすら純粋な出家者のみに神髓を伝え、法灯を守ることに転換したといわれる。<岡村：オレは ころして 正法眼蔵を読んでみよう>

良寛は、「眼蔵」にぶつかることによって、はじめて詩人的な法爾(ほうに一法そのまま、自然とそうなる)を視たと同時に、とき難い難問を背負わされた。良寛の後半生は、修証一等(修業は悟りの手段ではなく、修業と悟りは不可分一体である-道元)の実践だったといってもいい。迷いがそのまま悟りであり、悟りが迷いの形でしか表現しない。

栗田勇著<道元>道元の「正法眼蔵」は詩である。先生そういわれるが、なにぶんにもわからない、難しい、少しでもわかったというには、もう少し時間がかかりそうである。「正法眼蔵」のことを書いた本はたくさん出ている、その中のどれかがオレの琴線に触れるやもしれない、それを探さないと。文章の中に、二十歳頃に知ったランボーの詩も載っている。先生はこの一連の本の中で、一遍さんがお好きなようである。道元・一遍・良寛の話が続いた。

◎時よ、来い ああ 陶酔の時よ 来い

よくも忍んだ。覚えもしない。積もる怖れも苦しみも 空を目指して旅だった。

厭な気持ちに喉は涸れ 血の管に暗い蔭がさす。

ああ、時よ、来い。 陶酔の時よ、来い。

アルチュール・ランボー 小林秀雄訳：ランボーが出てくるとは、驚きと感激。3年前に亡くなった吉谷が、泥酔しながらもおおいに語っていたのは二十歳頃。早熟の天才詩人が、破天荒に生きていたその様に感激していたようだ。オレも「地獄の季節」という本を買わされ読んでいた。オレは当時、流行りの前衛芸術、具体美術のあたり、状況劇場のあたり、暗闇舞踏団のあたり、これらには目が向かなかつた。吉谷の弁。「彼らと 肝胆相照らし 飲みあかした」

◎六道輪廻の間には とみなふ人のなかりけり

独（ひとり）むまれて独死す 生死（しょうじ）の道こそかなしけれ

◎念仏の行者は、知恵も愚痴をも捨て、善悪の境界をも捨て、貴賤高下の道理をも捨て、地獄をおそる心をも捨て、極楽を願ふ心をも捨て、また諸宗の悟りをも捨て、一切を捨て、申す念仏こそ、弥陀超世の本願に最もかなひ候へ。西行の「撰集抄」の中で、空也が一遍に、「念仏をどうとらえたらよいか」と尋ねた時、「捨ててこそ」とだけ言った。一遍の念仏の心得は、驚くほど、道元の座禅についての言葉と似ている。

先生：「源氏物語」が日本の小説の巨峰だとするなら、これに並ぶ散文詩は「正法眼蔵」だと言ってもさしつかれない。

◎諸縁を放捨し、万事を休息すべし、善也不思量（ぜんやふしりょう）なり。心意識にあらず、念想観にあらず。作仏を図することなかれ、座臥（ざが-座っている時も寝ている時も-いつも）を脱落すべし。

道元が「只管打座」（しかんたざ一座禅すること）を厳しく勧めたことはよく知られている。が、座禅にとらわれることもまた戒めている。私たちががんじがらめにしている、因縁、社会や家族、欲望、執着、それらを放し捨て、万事を休止せよ。一遍の言う、「捨ててこそ」である。善について考えもしなければ、悪について思い煩うこともない。自己批判、自意識を捨てよ。心理的意識活動もしない。仏を念じ想像することもしない。「不図作仏」（ふとさぶつ）悟りをひらこうともするな。座禅をしているとか、寝ているとか、そんな区別を突き通ってしまうのだ。自己否定の極み也。

正法眼蔵とは「正法」釈迦の真の教え。「眼蔵」その世界を見とおす眼で、秘蔵の法をつたえるもの。

道元はとかく、哲学的、理性的にとられやすい。しかし求道熱血の人。彼の人生、苦悩と汗と涙の跡が刻まれていることを発見されるであろう。釈迦から直接伝わった、肌のぬくもりである。

◎座禅は習禅にあらず、大安楽の法門なり。不染汚（ふぜんな）の修証なり。

座禅ははじめから、成道そのものである。純粹な修業であり、悟りとまったく同じだという。

◎生也全機現（しょうやぜんきげん） 死也全機現（しやぜんきげん）

生きている間はただひたすら生きよ。死にさいしては死をむかい入れよ。絶対的現実がそこにある。

◎春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷（すず）しかりけり

今日もいつものように安威川河川敷にいる、走っている。ひざを痛めたのが一年前の十月中旬、「寒くなったらぶり返さないか あの痛みはいやだねえ 歩けないのはだめだねえ」とひやひやしていた。妙な痛みが走ったこともあったがなんとか持ち直し、正座まではいかないが、前へ後へ足が曲がる、足が跳ぶ。「少しスピードが あげられないか」「じじい 走り じゃつまらない」「歩いているヤツにも 追いつけない じゃない」ということで徐々にスピードアップ、なんだか毎日汗をかく、なんだか毎日ハーハーゼーゼー言っていると、ご満悦である。おかげで腹は減る、体重も減る、なぜに血圧だけ高くなる、とボヤキである。「この血圧は 執行猶予 一二年で 薬の世話になるやも 節制してください」と今年の健康診断は放免された。後ろで「ポシャ」と音がして川面の上をカワセミが追い抜かしていく、「待ってくれ」といえども彼の飛びは早い、パッと小枝に止まり、左折して消えてしまった。今年はこれで二回もカワセミを見た。黒い川面の上をなんときれいなブルー、絵の具では薄暗い色の上にブルーを乗せても沈んでしまっただけの輝きは出ない。あのブルーを出そうと思えば、暗い川面の上にもまず白色を置き、その上にブルーを置かないとあの色は出ないねえ。メタリックさえ感じさせるブルーにちらりオレンジ色を感じる。とにもかくにも奴はきれいだ。きれいで思い出すが、いつもの所に年老いたアオサギが佇んでいる、羽は艶を失いはね返っている、あれでも彼は縄張りを守っているのかもしれない。

いよいよ年の瀬、押しつまって来ました。いつものことながら、「オレはこの時期が きらいいだねえ いやだねえ」盆やら、GW やらもそうだけど、とくに年末年始は期間が長い、日常と違うということが嫌う理由、普通に時間が過ぎていくのが一番いい。そういえば若いころは、非日常が好きだったねえ。少年時代、青年時代、何か変わったことのある日、突然なにかの知らせが入り、慌てて行動しなければならぬ時、脳も筋肉も敏感に反応して、次へ次へと、嬉々として、行動していた。そういうことが嫌いになったということは細胞が安泰モード、老化ですかねえ。

先日ニュースで、アメリカが、「イスラエルの首都をエルサレムと認める」と宣言してから、またまたあの辺りがなんだか騒然としているらしい。「イスラエル・パレスチナ・エルサレム この話になると 過去 4000 年の事がわからねば わからない」解説氏がのたまう。先日来信仰の話、仏教の話をしてきたオレにとって、パレスチナの話聞き、「そうだったのか・・・」と驚き、自身の無知にあきれている。

アブラハム Abraham という人は、最初の預言者、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教のそれぞれで、「信仰の父」と言われている。「そんなことも知らないのか」と揶揄されるかもしれないが、知らなかった。昨今は、中東でもめている、いつもいつも中東のどこかで内戦が、テロが、戦闘が続いている。いつの時もこれらの宗教がらみ、民族がらみ、パワーゲームがらみなのか。解説氏が、「4000 年間これらの宗教が からみ 民族が からみで ごたごたが続いている ごたごたの連鎖が続いている がんじがらめにこんがらがっている」

エルサレムという都市は、イスラエルが首都だと宣言しているが、パレスチナ自治政府の都市でもある。そこにはこの三つの宗教の聖地がある。「嘆きの壁」ユダヤ教の最も神聖な聖地、かつて神殿が在ったが、この壁だけが現存している。「聖墳墓教会」キリストの墓とされる場所に立つ教会。「岩のドーム」イスラム教にとって重要なかわりを持つ聖なる岩を祀っている。

アブラハムは神に、「あなたの愛している子供 イサクを 全焼の生贄として 私にささげよ」という命令を受けた。アブラハムは神に逆らうことはせず、薪をもって、息子イサクを生贄としてささげるために出かけた。

検索すると世界中の信仰の話がたくさん出てくる、この三つの宗教の信仰の話、経典の話、歴史の話が。相変わらずオレには信仰する神はない。「一神教とはなんだろう」と人ごとのように不思議がっている。レンブラントの絵が出ている、老人（アブラハム）がイサクに切りつけようとして、天使に止められ刃物を落とすという絵だ。

◎忘年会をしましょうと言われ、「忘年会だけじゃ つまらない 2,3時間 ハイキング しましょうよ」「天王山もよし ポンポン山もよし」「それでは ポンポン山」ということが決まり車で神峰山寺から本山寺駐車場に向かった。ここは、一週間前にもやってきた。前日から寒波がやってきているという天気予報、寝る時にはアトリエの窓から風の鳴る音が聞こえた。「明日は まさか 道路凍結 ないだろうね」と怪しみながらも冷え冷えとした朝を迎えた。摂津峡上ノ口の峠を越えたあたりで、「お 上が白い 雪ですねえ」どこまで行けるか、ノーマルタイヤのオレの車、神峰山寺を越え、しばらく走ると雪が増えてきた、路肩を走ると滑る、「ここまで ですねえ ここらあたりで 止めて 歩きましょう」五名、ゆっくりペースで歩き始めた。

◎正月まで一週間を切ったという昨日は、墓参りに行った。毎年、盆と暮れに墓参りに行っている。墓は、長瀬と谷町九丁目にある。長瀬の墓は昔からある焼き場併設の大きな墓、盆には提灯代わりにぼんぼりを持って行き十日ぐらい経ってから持って帰る。駐車場もありゆっくりしてられるのに比べ、谷町九丁目は寺の前に路上駐車をして、そそくさと花を生け、線香をたて車に帰る。今回は山仲間の河瀬さんに、地図をもらいに行った。「山の地図が たくさんある 断捨離しようと思います 要る人 いますか」メールが来て即座に、「ほしい」と返信した。なんと、関で買った新品の篆刻刀までいただいた。トミーから靴も預かった。「雪用登山靴 どなたか 履けたら」と持ち帰ってしみじみ見てみると、イタリア製の雪用のなかなかいいものだ。もし大きかったら、喜んで履きたい。外はゴムと皮、中は今風にフィットする仕様、こんな靴なら欲しいねえと思いながらネットで調べると、3万円台のようだ。

◎雪の林道を五人がぶらり登っていると、スピードを出した車が警笛を鳴らして走り去った。「なんと えらい運転をする奴だ」と中をのぞいたが、僧衣を着た男のようだった。先日、本山寺の紹介サイトを調べていたら、この話が載っていた。本山寺の僧侶はどうも異常な奴のようである。サイト書き込みより：「正月2日に初詣、家族で雪道を踏み分けお参りしたのですが、途中、下ってきた乗用車が猛スピードで雪のシャーベットのなか、歩行者がいるにも関わらず、スピードを落とさず、かけられました。運転手を確認すると70代の男性。そこから本山寺にむかって山門に到着すると、ホーンをならしながらその車が帰ってきました。その無謀な運転者は当寺の住職ではありませんか。」

◎一週間前に来たときは上の方にほんのちらり雪があった程度、今日の本山寺は10センチぐらいの雪が積もっている。道の上も、いくつかの伽藍の屋根も、石段も、たっぷり雪が乗っている。正月前の赤や紫の旗は同じようにはためているが、まわりの景色は一変して銀世界。我が家から山に向かってちょっと進んだだけで、こんなにも違った景色が臨めるのかと驚きである。大きな木がある、スギやヒノキで天然の大きさを。寺の境内ですくすく育った木たちなのかな。少し外れるとスギの植林帯が続く。

◎今日の天気予報は、「曇り時々晴れ」という予報にたがわず薄暗い空の合間に、きらり陽の顔も見られる。陽が照ると、雪が舞う白い流れが右に左に揺れて見える。てっぺんにある温度計は-1度、それでも手袋をとって作業をしても痛くはない、三峰では指が痛かったのを思い出す。てっぺんで、「さあ食事 カップヌードルと、おにぎり」オレは水と家庭用コンロ、コッフェルとボンベを持参した。ヌードルに湯を注ぎ、おこわのおにぎり。本山寺ではあんパンとうまい菓子パンをいただき、チョコレートもいただき、はらいっぱいである。

◎ちょっとのハイキングの予定が5時間も歩いたようだ。下ってくると雪も湿りだした、道路も少し上では慎重に滑らないように歩いたが、下ってくると普通の道になっている。またまた先ほどの坊主車が、パッパ警笛を鳴らして走り去った。人が嫌いなのか、腹が立つのか、笑ってしまうけれども、ま、あんな奴、あんな僧侶、いるんだねえ。

◎アトリエに帰り着いて、机の用意、鍋の用意、コンロの用意。鯛一式をりっちゃんが用意してくれた。野菜と総菜を相・前の二人が用意してくれた。酒が2本、ビールがある、焼酎がある、6時間ほど騒いだようである。

◎まさかの大晦日の12月31日、「山へ」とお誘いがあり、「それじゃ 剣尾山（けんびさん）に行こう」とさっそく調べた。剣尾山は以前から何度か、「いい山だ 登ってみたい」という声を聞いていた、「そんな山は知らないぞ」「みんなが そんなに いいというなら」調べながら地図を発見、「2,3時間で 帰ってこられる 簡単な山 のようだ 大晦日には いい山カモ」朝7時、阪急電車茨木駅から610円、十三、川西能勢口で乗り換え、山下駅に降り立った。なぜ能勢電鉄山下駅かというと、「明日 31日 山へ」と誘ってきた磯部さんが住んでいる。初めて降り立った駅、昨日のうちに検索したメモをたよりに5分も歩くと、「見野2丁目」の交差点、想いもよらず立派な道路、道路わきにはいくつかの店舗、「まさかの ここは なかなかの 街ではないか」と思って歩いたが、お住まいの方々には失礼。角を曲がると外に出ていた彼が手を振ってくれ、すぐに会え、コーヒー一杯ごちそうになり、車で出発した。

◎剣尾山もここらあたりも初めて、能勢街道をまっすぐ北に向かえばいい、すぐのはず。山の地図と登り口のメモは持ってきた。少し走ったところにあるコンビニで、弁当を買うという。そのあんなちゃんに聞くと、「能勢の郷」は10分も走ると右手にあるという。しばらく走ると、「行者口」のバス停がある、「もう少し走って」と次の信号の角に、「能勢の郷は右方向」の標識、「おおこれだ」と右に左に登っていくと、まずは駐車場、次に温泉の駐車場がある。「登山者は温泉駐車場に止めないで」の看板を見て、手前の大きな駐車場へ、我々だけである。周りを見渡しても登山口は見えない、「ままよ こっちに 行ってみよう」と歩き出す。「右は行者口バス停」「左は剣尾山」の看板を発見。歩いていると次に、「右は剣尾山」の看板、いよいよ整備された階段の登山道を登っていく。

◎昨日の夜はなんだか暖かい、ひさしぶりに寒気が去ったのか、明日は午後から雨の予報、「この暖かさは、まさか雨が早く来ないよね」と祈りつつ、曇り空の中を歩き続けた。山道には全く雪がない、手袋もいらぬ。すぐに大きな岩が出てきた、大きいと言ってもそのスケールは大きすぎる。山自体が岩なら岩山だが、ここの巨岩は、ゴロリ、転がりかけ、すんでのところまで止まっている、あれがもしもゴロリともう一回転すれば、大型バスでも隠れてしまうというスケールの岩がいくつも。登るときには見逃していたがひとつ目の岩には、下る途中に上の方に目をやると、仏の姿が線彫りされている。この仏の姿はなかなか上手に描いてある、絵師と、石の彫師合作でないと、ああも上手くは描けないだろうというように、大きなスケールで、彫られ彩色されている。いつの時代のものかはわからないが、なかなかいいねえと眺めていたが、登山口の説明看板には、ここの行場は、奈良の大峰に対し、摂津の行場として栄えたらしい。また、この彫られた仏は、昭和10年にエボシ岩に掘られた不動明王らしい。「仏の絵は近作か なんだ・・・」

◎頂上にやってきた、先ほどからの薄暗い曇り空が嘘のように陽が照っている、穏やかで温かい。日本海が京都の愛宕山が、明石が、見えるかもしれないというが今日は空気は霞んでいる。先日来の三峰・ポンポン山は、寒波の影響で厳しい寒さを感じた。三峰のてっぺんでは風がきつく手袋を外してカメラをとるけれども指が痛くて手袋を外せなかった。ポンポン山も近所のハイキングの山だけれどてっぺんには20センチの積雪だった。この剣尾山は巨大岩ゴロゴロの異様な景観に似ず、穏やかな、簡単な登り、ハイキング程度の軽さ、子ども連れにはいい山だろう。

頂上直下の古い時代の月峯寺跡（げっぼうじ）今も建物の礎石や石垣が散らばっている。鎌倉時代の石造物、平安時代の土器も出土している。本堂・鐘楼・井戸など大伽藍がうかがわれる。それらの石垣の上に伽藍がそびえていた、人がいた、人の息吹があった、人が生まれ死んでいった。そう考えると不思議な光景が蘇ってくる、精霊に妖怪に、幽霊もいるかもねえ、夜に来たいものだ、夜に彼らと遊びたいものだ。

◎近所に銀山跡があるというので見に行った。大晦日で資料館は閉まっている、坑道も普段は入っていけないらしいが今日は鍵がかかっていた。少し上の手掘り坑道へ近づくと、暗い穴の中にきらきら光るものが見える。「銀かな」「銀かも」「でもねえ アメリカの ゴールドラッシュの 遺跡では キラキラ光るものを 置いてる らしいよ」「がははそれも ありかな」ここ多田銀山は半世紀前まで操業していたらしい。オレは日本の鉱山に興味がある。